

旺文社文庫

阿部一族・雁・高瀬舟

森 鷗外著



「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

阿部 良

〔編集顧問〕 伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
(五十音順) 塩田良平 中島健蔵 森戸辰男

旺文社文庫 阿部一族・雁・高瀬舟 160 円



昭和40年9月20日 初版発行
昭和47年6月10日 重版発行

著者 森 鷗 外
発行者 根本 峰 好
印刷所 株式会社 文弘社

発行所 株式会社 旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111〔代〕

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします
書店または本社に直接お申し出ください

0193|610-09|0724

703015

© 旺文社 1965

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

(中村印刷・清水印刷・穴口製本)

旺文社文庫

阿部一族・雁・高瀬舟

森 鷗 外 著

旺文社

目 次

阿 部 一 族

雁^がん

高 瀬 舟

解 説

人と文学

作品解説

作品鑑賞

「阿部一族」・「雁」・「高瀬舟」の思い出

父鷗外との散歩

代表作品解題

参考文献

年 譜

成瀬正勝

江口 渙

森 於菟

挿絵

東光寺啓

五

五三

一七九

一九九

一九九

二〇七

二二五

二二八

二三三

二二六

二二〇

二二二

原文は新仮名づかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

(編集部)

阿
部
一
族

從四位下左近衛少將兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、よそより早く咲く領地肥後国(3)の花を見すて、五十四万石の大名の晴れ晴れしい行列に前後を囲ませ、南より北へ歩みを運ぶ春とともに、江戸を志して参勤の途に上ろうとしているうち、図らず病にかかつて、典医の方劑も功を奏せず、日にまし重くなるばかりなので、江戸へは出発日延の飛脚が立つ。徳川將軍は名君の譽れの高い三代目の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取って大功を立てた忠利の身の上を氣づかい、三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後守、阿部對馬守の連名の沙汰書を作らせ、針医以策というものを、京都から下向させる。続いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門という侍を上使につかわす。大名に対する將軍家の取り扱いとしては、丁重を極めたものであった。島原征伐がこの年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜わったり、鷹狩の鶴を下されたり、不断慰懃を尽くしていた將軍家の事であるから、このたびの大病を聞いて、先例の許す限りの慰問をさせたのももっともである。

將軍家がこういう手続きをする前に、熊本花畑の館では忠利の病がすみやかになって、とうとう三月十七日申の刻に五十六歳でなくなった。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻(14)にすぐれていた。(2)一六四一年。(3)現在の熊本県。(4)参勤交代。江戸幕府が諸大名に課した義務の一つ。隔年交替に江戸と領地に居住した。(5)一六〇四一五、徳川三代將軍(一六二三一五二)。二代將軍秀忠の第二子。(6)島原の乱。寛永十四年一十五年、肥前天草及び島原の耶穌教徒のおこした内乱。(7)一六二二一三八、益田時貞。江戸初期のキリシタン教徒。島原の乱で盟主におされた。(8)一五九六一六六二、松平信綱。家光に仕え、のち老中となる。島原の乱を鎮定。伊豆守になったので世に知恵伊豆と称された。(9)一六〇二一七五、阿部忠秋。老中。(10)一五九八一六五一、阿部重次。正次の子。老中。(11)官府の命令・指圖書。(12)幕府からの使者。(13)一定の敷地以外に、さらに添え加える土地。(14)現在の熊本市花畑町。

せた人で、今年ことし四十五歳しごになっている。名をお千せんの方かたという。嫡子ちやくし六丸は六年前に元服げんぷくして、將軍家から光みつの字を賜たまわり、光貞みつさだと名のつて、從四位下じゆよんのげ侍從ひごのからみ兼肥後守ひごのからみにせられている。今年十七歳である。江戸參勤中とのおとうみのくにで遠江とのおとうみのくに国浜松まで歸かへつたが、訃音ふいんを聞いて引き返した。光貞は後名を光尚みつひさと改めた。二男鶴千代は小さい時から立田山たつたやまの泰勝寺たいしょうじにやつてある。京都妙心寺みょうしんじ出身の大淵和尚たいえんおしょうの弟子でしになつて宗玄そうげんといつてゐる。三男松之助は細川家に旧縁のある長岡氏に養やしなはれてゐる。四男勝千代は家臣南条大膳なんじようだいぜんの養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姫は松平周防守忠弘まつだいらすおうのかみただひろの奥方おくはうになつてゐる。二女竹姫は後に有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三齋さんさいの三男に生まれたので、四男中務大輔立孝なかつかさいいふたつたか、五男刑部興孝ぎようぶおきたか、六男長岡式部寄之よりゆきの三人がある。妹には稲葉一通いなば かずみちに嫁した多羅姫たらひめ、烏丸中納言光賢からすまるちゆうなんみつたかに嫁した万姫がある。この万姫の腹に生まれた禰禰姫ねねひめが忠利の嫡子光尚の奥方になつて来るのである。目上には長岡氏を名のる兄が二人、前野長岡両家に嫁した姉が二人ある。隱居三齋宗立いんきよさんさいそうりゆうもまだ存命で、七十九歳になつてゐる。この中には嫡子光貞のように江戸にいたり、また京都、そのほか遠国にいる人たちもあるが、それが後に知らせを受けて嘆いたのちがつて、熊本の館やかたにいたかぎりの人たちの嘆きは、わけて痛切なものであつた。江戸への注進ちゆうしんには六島少吉しましやうきち、津田六左衛門しよなぬかの二人が立つた。

三月二十四日には初七日しよなぬかの営えいみがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板とこいたを引き放つて、土中に置いてあつた棺かんをかき上げて、江戸からのさしずによつて、飽田郡春日村岫雲院あくだごおり しゆううんいんで遺骸いがいを茶毗だひにして、高麗門こうらいもんの外の山に葬おたまやつた。この靈屋の下に、翌年の冬になつて、護国山妙解寺みこくさんみょうげじが建

(1)死亡のしらせ。訃報。(2)忠興の剃髮号。三齋宗立。(3)事変を注して上に申し進める使者。(4)火葬。

立せられて、江戸品川東海寺から沢庵和尚(1)の同門の啓室和尚(2)が来て住持になり、それが寺内の臨流庵に隠居してから、忠利の二男で出家していた宗玄が、天岸和尚と号して跡つぎになるのである。忠利の法号は妙解院殿台雲宗伍大居士(3)とつけられた。

岫雲院で茶毗(4)になったのは、忠利の遺言によったのである。いつの事であったか、忠利が方目狩(5)に出て、この岫雲院で休んで茶を飲んだ事がある。その時忠利はふと腮髯(6)の伸びているのに気がついて住持に剃刀はないかといった。住持が盥(7)に水を取って、剃刀を添えて出した。忠利はきげんよく児小姓(8)に髯をそらせながら、住持に言った。「どうじゃな。この剃刀では亡者の頭をたくさんそったであろうな」といった。住持はなんと返事をしていいかわからぬので、ひどく困った。この時から忠利は岫雲院の住持と心安くなっていたので、茶毗所をこの寺にきめたのである。ちょうど茶毗の最中であつた。柩(9)の供をして来ていた家臣たちの群に、「あれ、お鷹(10)がお鷹が」という声がした。境内の杉の木立にかぎられて、鈍い青色をしている空の下、円形(11)の石の井筒の上に笠のようにたれかかっている葉桜の上のほうに、二羽の鷹が輪をかいて飛んでいたのである。人々が不思議がって見ているうちに、二羽が尾と嘴(12)と触れるようにあとさきに続いて、さっと落として来て、桜の下の方の中にはいった。寺の門前でしばらく何かを言い争っていた五六人の中から、二人の男が駆け出して、井の端(13)に来て、石の井筒に手をかけて中をのぞいた。その時鷹は水底深く沈んでしまつて、齒(14)の茂みの中に鏡のように光っている水面は、もう元のとおりに平らになっていた。二人

(1)一五七三―一六四五。江戸初期の傑僧。家光の建てた品川東海寺の初代住職。(2)一五九七―一六六六、もと江戸祥雲寺住職。(3)方目は鵜(15)。クイナに似た、はとぐらいの大ききの鳥。肉は美味。(4)まだ元服しない小姓。

の男は鷹匠衆たかじやうしゆうであつた。井の底にくぐり入って死んだのは、忠利が愛ありしていた有明、明石あかしという二羽の鷹であつた。その事がわかつた時、人々の間に、「それではお鷹も殉死じゆんししたのか」とささやく声が聞こえた。それは殿様がお隠れになつた当日から一昨日おとつひまでに殉死した家臣が十余人あつて、中にも一昨日は八人一時に切腹し、昨日きのうも一人切腹したので、家中かちゆうたれ一人殉死いちにんの事を思わずにいゝるものはなかつたからである。二羽の鷹はどういう手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物を追うように、井戸の中に飛び込んだかしらぬが、それをせんさくしようなどと思ふものは一人もない。鷹は殿様のご寵愛ちやうあいなされたもので、それが茶毗だびの当日に、しかもお茶毗所の岫雲院の井戸にはいつて死んだというだけの事実を見て、鷹が殉死したのだという判断をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする余地はなかつたのである。

中陰ちゆういんの四十九日しじゅうくにちが五月五日にすんだ。これまでは宗玄を始めとして、既西堂、金両堂、天授庵、聴松院、不二庵等の僧侶が勤行ごんぎやうをしていたのである。さて五月六日になつたが、まだ殉死する人がぼつぽつある。殉死する本人や親兄弟妻子はいうまでもなく、何のゆかりもないものでも、京都から来るお針医はりいと江戸から下る御上使ごじやうしとの接待の用意なんぞはうわのそらでして、ただ殉死の事ばかり思っている。例年のとし簷のきにふく端午たんごの菖蒲しょうぶもつまず、ましてや初轍はつちやくの祝いをする子のある家も、その子の生まれた事を忘れたようにして、静まりかえっている。

(1)江戸幕府の職名。主君の鷹をあずかつて馴養し、鷹狩りに従事した役。(2)主君・尊族の死んだあとを追つて臣下・卑族などが自殺すること。「おいばら」ともいう。(3)人の死後四十九日間の称。(4)仏前に読経や回向えこうをする。

殉死にはいつどうしてきまったともなく、自然に掟^{おきて}ができてゐる。どれほど殿様をたいせつに思えばといつて、たれでもかつてに殉死ができるものではない。太平の世の江戸参勤のお供、いざ戦争という時の陣中へのお供と同じ事で、死天^{しでん}の山三途^{さんず}の川のお供をするにもせひ殿様のお許しを得なくてはならない。その許しもないのに死んでは、それは犬死^{いぬじに}である。武士は名聞^{みやうもん}がたいせつだから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死^{うちじに}をするのはりっぱではあるが、軍令にそむいて拔駆^{ぬけがけ}⁽¹⁾をして死んでは功にはならない。それが犬死であると同じ事で、お許しのないに殉死しては、これも犬死である。たまにそういう人で犬死にならないのは、値遇^{ちぐう}を得た君臣の間に默契があつて、お許しはなくてもお許しがあつたのと変わらぬのである。仏涅槃^{ぶつねはん}の後に起こつた大乘^{だいじやう}の教えは、仏のお許しはなかったが、過現未^{かげんみ}を通じて知らぬ事のない仏は、そういう教えが出てくるものだとして懸^{けん}⁽²⁾許しておいたものだとしてある。お許しがないのに殉死のできるのは金口^{こんぐち}で説かれると同じように、大乘の教えを説くようなものであらう。

そんならどうしてお許しを得るかという、このたび殉死した人々の中の内藤長十郎元統^{もとつぐ}が願つた手段などがよい例である。長十郎は平生忠利の机回^{つくえまわり}⁽⁴⁾の用を勤めて、格別のご懇意をこうむつたもので、病床を離れずに介抱^{かいほう}をしていた。もはや本復^{ほんふく}はおぼつかないと、忠利が悟つた時、長十郎に「末期^{まつご}がちこうなつたら、あの不二と書いてある大文字の懸物^{かけもの}をまくら元に掛けてくれ」と言いつけておいた。三月十七日に容体が次第に重くなつて、忠利が「あの懸物を掛けえ」と言つ

(1) 戦場でこっそり陣屋を抜け出て敵を攻めること。(2) あらかじめ許すことをかかげ示す。(3) 釈迦の説法。(4) 主君のそばに日夜つかえて、用事をする近習役。

た。長十郎はそれを掛けた。忠利はそれを一目見て、しばらく瞑目めいもくしていた。それから忠利が「足がだるい」と言った。長十郎は搔卷かいまきの裾すそをしずかにまくって、忠利の足をさすりながら、忠利の顔をじっと見ると忠利もじっと見返した。

「長十郎お願いがござりまする。」

「なんじゃ。」

「ご病気はいかにもご重体のようにはお見受け申しますが、神仏の加護、良薬りょうけんの功験こうけんで、一日も早うご全快遊ばすようにと、祈願いたしております。それでも万一と申すことがござりまする。もしもの事がござりましたら、どうぞ長十郎奴めにお供を仰せつけられますように。」

こう言いながら長十郎は忠利の足をそっと持ち上げて、自分の額ひたいに押しあてていただいた。目には涙がいっぱい浮かんでいた。

「それはいかんぞよ。」こう言って忠利は今まで長十郎と顔を見合わせていたのに、半分寝返りをするようにわきを向いた。

「どうぞそうおっしゃらずに。」長十郎はまた忠利の足をいただいた。

「いかんいかん。」顔をそむけたままで言った。

列座の者の中から、「弱輩すいさんの身をもって推参すいさんじゃ、控えたらよかろう」と言ったものがある。長十郎は当年十七歳である。

「どうぞ。」咽のどにつかえたような声で言って、長十郎は三度目にいただいた足をいつまでも額にあてて放さずにいた。

「情のこわいやつ⁽¹⁾じゃな。」声はおこってしかるようであつたが、忠利はこの言葉とともに二度うなずいた。

長十郎は「はっ」と言つて、両手で忠利の足をかかえたまま、床の後ろにうつぶして、しばらく動かずにいた。その時長十郎が心の中には、非常な難所^{かま}を通つて行き着かなくてはならぬ所へ行き着いたような、力のゆるみと心の落ち着きとが満ちあふれて、そのほかの事は何も意識に上らず、備後^{びんご}置⁽²⁾の上に涙のこぼれるのも知らなかつた。

長十郎はまだ弱輩で何一つきわだつた功績もなかつたが、忠利は始終目をかけてそば近く使つていた。酒が好きで、別人なら無礼^{ぶれい}のおとがめもありそうな失錯^{しつさく}をしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのではない、酒がしたのでじゃ」と言つて笑つていた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過^{あやまち}を償^{つぐな}わなくてはならぬと思ひ込んでいた長十郎は、忠利の病氣が重^{おも}つてから⁽³⁾は、その報謝と賠償との道は殉死のほかないとかたく信ずるようになった。しかし細かにこの男の心中に立ち入つてみると、自分の発意^{はつい}で殉死しなくてはならぬという心持ちのかたわら、人が自分を殉死するはずのものだと思つているにちがいないから、自分は殉死を余儀なくせられていゝと、人にすがつて死の方向へ進んで行くような心持ちが、ほとんど同じ強さに存在していた。反面からいうと、もし自分が殉死せずにいたら、恐ろしい屈辱^{くつじよく}を受けるにちがいないと心配していたのである。こういう弱みのある長十郎ではあるが、死をおそれる念はみじんもない。それだからどうぞ殿様に殉死を許していただこうという願望^{がんもう}は、何物の障害をもこうむらずにこの男の意志の全幅を領

(1)強情者。(2)備後表。備後地方(広島県の管轄)から産する最上の畳表。(3)重くなつて。

していたのである。

しばらくして長十郎は両手で持っている殿様の足に力はいって少し踏み伸ばされるように感じた。これはまただるくおなりになったのだと思ったので、また最初のようにしずかにさすり始めた。この時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮かんた。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けるということを考えて、それでおのれは家族を安穩な地位において、安んじて死ぬることができると思った。それと同時に長十郎の顔は晴れ晴れした気色になった。

四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、始めて殉死の事を明かしていとまごいをした。母は少しも驚かなかった。それは互いに口に出しては言わぬが、きょうはせがれが切腹する日だと、母もとうから思っていたからである。もし切腹しないとも言ったら、母はさぞ驚いたことであろう。

母はまだもらったばかりのよめが勝手にいたのをその席へ呼んで、ただしたくができたかと問うた。よめはすぐにたつて、勝手からかねて用意してあった杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じように、夫がきょう切腹するということをとうから知っていた。髪をきれいになでつけて、よい分の不斷着に着替えている。母もよめも改まった、まじめな顔をしているのは同じ事であるが、ただよめの目のふちが赤くなっているの、勝手にいた時泣いたことがわかる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

四人は黙って杯を取りかわした。杯が一巡した時母が言った。

「長十郎や。お前の好きな酒じゃ。すこしすごしてはどうじゃな。」

「ほんにそうでござりまするな」と言つて、長十郎は微笑を含んで心地よげに杯を重ねた。

しばらくして長十郎が母に言った。「よい心持ちに酔えいました。先日からかれこれと心づかいをいたしましたせいか、いつもより酒がきいたようござります。ごめんをこうむってちょっと一休みいたしましょう。」

こう言つて長十郎はたつて居間にはいったが、すぐに部屋のまん中にころがつて、いびきをかきだした。女房があとからそつとはいつて枕まくらを出して当てさせた時、長十郎は「ううん」とうなつて寝返りをしただけで、またいびきをかき続けている。女房はじつと夫の顔を見ていたが、たちまちあわてたやうになつて部屋へ行った。泣いてはならぬと思つたのである。

家はひっそりとしている。ちょうど主人の決心を母と妻とが言わずに知つていたやうに、家け隷も女中も知つていたので、勝手からも厩うまやのほうからも笑声などは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、じつと物を思っている。主人は居間でいびきをかいて寝ている。あけ放つてある居間の窓には、下に風鈴ふうりんをつけた吊葱つりしのぶがつつてある。その風鈴がおりおり思い出したやうにかすかに鳴る。その下にはたけの高い石の頂いただきを掘りくぼめた手水鉢ちやうすばちがある。その上にふせてある捲物まきものの柄杓ひしやくに、やんまが一匹止まつて、羽を山形にたれて動かずにいる。

一時ひとときたつ。二時ふたときたつ。もう午ひるを過ぎた。食事のしたくは女中に言いつけてあるが、姑しゅうとめが食べると言われるか、どうだかわからぬと思つて、よめは聞きに行こうと思ひながらためらつていた。も